

音楽鑑賞における感情の身体性

森永 豊 (Yutaka Morinaga)

國學院大学

我々は音楽を聴いた時にしばしば情動用語を用いて作品を語る。この音楽作品は「物憂げだ」、「怒りの感じに溢れている」、「メランコリーを湛えている」、「快活だ」等。こうした言明は事実を表しており、真理条件をもつのだろうか？ 本発表で私は、事実を表していると言うことに十分な根拠がないと論じる。それならば、こうした語りは文字どおりには偽で、隠喩のような修辞表現と考えるべきだろうか？ 私はこうした語りが事実を表しうるものではないと考えながらも、修辞表現と考えるべきだとは思わない。「この曲は物憂げだ」という言明が真理条件を持たない場合でも、それが主張可能性条件を持っているとみなす余地があるのではないか。言明で指示される音楽作品は「物憂げ」のどの意味においても事実として物憂げであるわけではない。けれども、音楽作品を聴くことに伴って感じられる情動を曲に投影するがゆえに、描写が意味をもつと言えるのではないか。本発表では音楽作品が情動と関係するのは連合によるという見解に立って、「この曲は物憂げだ」の意味を理解する可能性を論じる。ピーター・キヴィー(Kivy, 2002)の類似説を批判しながら、その洞察を部分的に吸収する形で以上の問題に取り組む。

1 「この曲は物憂げだ」は事実を表していない

表出的性質の帰属

音楽がリアルな仕方で情動と関係するとする場合、作品が物憂さなどの情動を感じることがないので、その代わりに、作品が表出的性質を持つと考えることになる。「表出的性質」とは、必ずしも対象に情動を帰属しないけれども情動用語で対象を描写する場合、そこで情動用語を帰属させた特徴である。「セントバーナードの憂鬱な顔つき」がその一例である。そして「この曲は物憂げだ」という言明が事実を表すと主張できる単一の有望な候補が、「この曲」で指示される対象が「物憂さ」と記述される表出的性質を持つという可能性だ。

キヴィーは、ひとが作品に一致して情動を見出すケースがあると言う。たしかにこの「一致」というポイントに訴えることができれば、ひとが作品に表出的性質を帰属することが客観的に正しいと言うための理由になる。だが、私は音楽作品が情動的性質を持つことを肯定するのは困難だと考える。その理由として、顔文字や犬の顔つきと同じ安定性において作品が表出的性質を持つとは言い難いことを詳しく論じる。

キヴィーはまた、ひとの表出的な振る舞いと類似性を伝って作品に表出的性質を帰属する理由を(類似説については源河発表も参照)、進化の過程でヒトが環境に適応してきた結果であると推測する。もしも表出的性質を作品に帰属することに生物学的な基

盤が与えられれば、ひとが作品に表出的性質を帰属することが正しいと言うための別の理由になる。だが、本発表ではキヴィーのこの推測が説明としてうまく機能していない点を指摘する。

類似説と「和音」の問題

キヴィーは情動が見出される場合の一つに、情動的な響きをもつ音楽的特徴を挙げている。その顕著な例が和音である。ひとの表出的な振る舞いと和音の間の類似性が明確でないため、この場合が従来の類似説でうまく説明できない。そこでキヴィーは和音とひとの表出的な振る舞いの類似性を音楽形式から記述できるように、従来から唱えてきた音楽の形式主義に対して改変を施す。

形式主義

形式主義とは、音楽は作品の外にあるなにもものも表示せず、意味内容を欠いており、形式に尽きるという立場である。そして、音の構造と形式を発見することで得られる知的な愉悅をもたらせるという点に音楽の芸術的価値を置く立場だ。

強化版形式主義

作品のメロディーや伴奏には主音と調性が定められており、この下で各和音には他の特定の和音への解決(resolution)に向かうという特徴が与えられる。これが和音に動きを与える。例えばディミニッシュの和音はそこには落ち着かないのでより安定的で支配的な他の和音へと動いていきたくなくなるという特徴がある。「解決に向かう」という点に情動に特徴的な振る舞い(不安で「じっとしてられない」こと、等)との類似性が見出せる。表出的性質を担う音楽的構造も作品の形式の一部とするのである。

この類似性は自然なものではなくて、特定の文化における音楽体系に相対的である。発表者は、作品と情動の関係は全てこのような相対性を持つと考える。そして、音楽がリアルな仕方で情動と関係するとする立場に譲歩を迫る方向で議論する。

2 「この曲は物憂げだ」の意味を主張可能性から捉える

作品は様々な解釈を許すような幅を持っており、どういう情動を見出すかには個人差があるものだ。しかし個人差にも限度があるとも考えられる。発表者はこうした点を標準(musical norm)というアイデアと情動用語を用いた音楽の記述の主張可能性条件とを用いて捉えたい。標準は音楽鑑賞で許容される態度や記述の範囲を作るものだ。

音楽を鑑賞する態度は、身体的に他者と隣りあいになり、その人々と共感しながら形成される。社会の様々な場面で音楽が果たすべき機能や目的が定められており、特定の音楽から聞き取る特定の感情のレパートリーがおおよそ共有されており、ひとはすでにそうした機能に熟知した他者に合わせて音楽を聞くことによって、標準を我が物にする。我々は音楽に感情を聞き取るが、それは共感された感情の投影によって形成される習慣なのである。音楽に感情を見出すことにとって、連合は鍵であり、また、他者と身体を揺らしながら音楽を聴いた(奏でた)来歴も同様に鍵なのである。